

再び「木村の前に木村なく、木村の後に木村なし」

いつぞや、この欄に「木村の前に木村なく、木村の後に木村なし」と最大級の敬意を表して書いたところ、誰やらに負けたとか、プロレスの力道山に負けたではないか、さらには山下のファンらしく、山下先生とは時代が違うしルールも違うなど、わけもわからん連中がゴチャゴチャと匿名で書く。いちいち反証をあげていくのも面倒だから抹消した。2011年、増田俊也氏が丹念に資料を渉猟し、18年かけて木村政彦を調べ上げた。その努力に敬意をあらわすとともに、前回はボク自身のおぼろげな記憶に基づいて書いたものであることから再度掲載することにした。

木村が阿部謙四郎に判定負けを喫したのは拓大予科2年、19歳のときで、自らの柔道を諦め故郷に帰る決意をしたとき、師匠の牛島辰熊に諭され、練習に励んだ。木村は騒がれ、天狗になっていた。そして、自らの柔道に欠陥があることに気づいてそれを修正し、1年後、阿部との稽古で「羽目板に11回、畳に6回叩きつけてやりました」と牛島に報告した。阿部は兵役にとられたこともあり、超一流でありながら以後表面にでなくなった。ただし2人は仲が悪いわけではなく、後年、イギリスで再会してずっと一緒に呑み歩いた

という。それ以後、つまり昭和 12 年から木村は誰にも負けることもなく、戦争をはさんでずっと日本一を通した。プロになるまで、15 年間無敗とされている。

増田氏の著作は「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」。柔道のみならず、合気道や極真空手の大山倍達、プロレスにいたるまで幅広く調査しており、読み物としても資料としても一級品である。

ボクがもっとも驚いたのは、合気道の不世出の達人・塩田剛三さんが木村と同期の親友だったことである。(塩田剛三さんの話は別に書く予定) 塩田はつねに木村を評価し、庇い続け、大切にした。

木村は、昭和 12 年から 15 年の天覧試合まで日本選士権をとり、戦後昭和 23 年には松本安市を脇がため腕を折り、24 年には群を抜いて強かった石川隆彦と引き分けて両者優勝になり、13 年間王者として君臨した。石川が晩年、あれは負けていたと述べている。審判が三船久蔵で、牛島嫌いだっただけで優勢であったにもかかわらず引き分けの裁定をくださったものである。その 2 年後にブラジルのエリオ・グレイシーと闘い、2 ラウンドで屠る。(1 ラウンド 10 分)……のちの話で、木村と同時代の柔道家が、「2 ラウンドまでいったのですか！ エリオは凄い選手ですね。われわれの場合は、木村先生と

練習するときは、**何秒もつか**、が話題でしたから」

エリオとの試合の前に全日本クラスの選手があつという間に倒されているから、エリオの生涯唯一の敗戦というのもうなづける。このエリオとの試合でも、全盛期から10年は経っている

グレイシー柔術は、今なお不敗を誇っている。このグレイシー柔術のもとになったのがコンデ・コマ、前田光世である。2千試合で不敗という、この人の生涯も読んでいてワクワクするものである。

それはともかく、15年間（プロ柔道に進んだため、柔道界ではこの数字を採用している。）不敗を誇った木村がプロ柔道やプロレスに参加するのは奥様の医療費を稼ぐためだった。当時は、たとえばペニシリンでさえ、なかなか入手できず、大学病院でさえ現金と交換でないと打てなかった時代である。結核に対するストマイも同じである。・・・そのかわり、ものすごく効いたらしい。

山下が強いと言われる頃に、木村とどちらが強いか、と話題になって、そのことを尋ねられた木村は、「そんなことを聞くものじゃないよ」と言ったというが、**当然オレではないか**、が答だろうな。「今の柔道はブタのやる柔道」と嗤っていた。山下ごときと比較するのは失礼だろう。10連覇しなさいと激励したそうであるが、遠藤との

試合では「引き分け（蟹鉋みで足首の骨折で痛みわけ）」になっているが、木村はあれは負けていたなど山下に言っているし、10連覇がかかった斉藤との試合でもあとからビデオで見ると、少なくとも有効で斉藤が勝っていた。当時のルールでもそうである。

むしろ、木村に比肩し得るのは前田光世だろう。それなら話はわかる。・・・徳三宝が、「全盛時の西郷四郎とどちらが」といわれた。

東京オリンピックのとき、木村はすでに全盛期から 20 年以上も経って 47 歳だったが、ヘーシンクに対抗する選手がなかなか決まらず、結局神永に決まったが、一時は冗談でなく木村政彦を、と考えたらしい。・・・神永がヘーシンクと戦うことになったが、このころ、神永が結婚したことに対し、東洋の魔女（バレーボールでオリンピック優勝）たちは女性でありながら結婚もせずに練習に励んでいる。神永は考えが甘い、と苦言を呈した人もいる。この時、カナダのダグラス・ロジャース（190 cm 120 kg）は重量級で銀メダルを獲得したのだが、拓大で木村と乱捕りをして全く歯が立たなかった、という。立ち技でも、例えば大外刈りひとつとっても、その正確さ、スピード、迫力。全盛期から 20 年を過ぎていたはずであるが、40 代後半の木村におもちゃにされたという。さらには寝技。て

んで歯が立たない。ヘーシンクでもルスカでもロシアのサンボの選手でも同じように木村にはかなわないだろうとロジャースが淡々と言う。あのスピード、引きつけ、崩し、投げるまでの迫力は、今（当時）の選手にはだせません。若いころの豊富な練習量によって獲得したもので、打ち込むポイントは1ミリとはずさない。柔道用に作られたマシンのようなもの。

木村の大外刈りは、むしろ大外落しとでもいうもので、一流選手が軒並み受身をとれず脳震盪をおこしてしまうのでいつか禁じ手になった。・・・相撲で雷電の張り手が禁じ手になったようなもの。木村が大外刈りにくると、その場にしゃがみこんでそれを防いだ、という。木村の強さは立ち技でも寝技でも超一流だからこそである。打撃に対しても訓練をしている。最強の格闘家だったのである。

さて、いよいよ諸説ある力道山との巖流島決戦について書かねばならない。試合前から虚々実々の駆け引きがあり、戦う前にお互いに念書を交わすことになっていたのだが、力道山は催促しても提出せず、のちに「木村が八百長を頼んできた」証拠にしている。このとき、一勝一敗の引き分けにするという話になっていた。そのため

か、木村はほとんど練習せず、前夜まで大酒を呑んでいた。そして試合中にも力道山がなぜか本気になっているのを気付かず、とまどった表情をしている。増田氏は数人の格闘家に画像（動画）をみてもらったところ、木村の体調がよくないことを指摘する人が多く、つまり鍛錬していないということである。引き分けにする話が先にあり、力道山の謀略にまんまと乗ってしまった木村に油断があったのは否めない。以下、力道山ファンには叱られそうだが、彼は恩義のある人にも尊大な態度で接してみたり、あるいは誰かが亡くなった時にも涙を流しながら靴下をはかせようとしたり、単なるパフォーマンスで真心から出たしぐさではない。木村との試合でもレフェリーのため死角になっているところから攻撃したり、心底、木村政彦が怖かったのである。

力道山の人格や人間性については、猪木や馬場が完全に否定している。木村の弟分としていつも金魚のなんとかのように付き従っていた大山倍達が、「力動、ゆるさん！」とリングに上がろうとして周囲が必死になってとめた。（これは「カラテバカー代」にも載っている。・・・念のため、カラテバカー代はフィクションということに現在はみとめられていて、真実はほとんどない、というのが斯界の常

識で、われわれの若い頃の「夢」が無残にも打ち砕かれたのである。

詳しくは「大山倍達正伝」をお読みあれ。）

しかし、50年以上経過した現在でもプロレスの人気が続いているわけだが、これを創り上げたのは一代の梟雄力道山である。まさかにプロレスの試合が本気で戦っていると信じている人はいないだろうが、プロレスというのは、途中の経過についてはともかく、結果は台本がある八百長なのである。だから遠藤幸吉のような柔道出身のプロレスラーが、木村政彦を慕ってやまないのである。

木村にはあんなパフォーマンスは似合わない。もともとそういう道に進むべきではなかったのだが、生活のためにやむを得なかった、そういう時代である。戦争の傷跡である。

木村はさわやかな人柄であり、世渡りが下手な不器用な男であるが、接した人みな「もう一度木村に会いたいなあ」と思わせる、何とも言えぬオーラがあり、女性にももてた。

木村の強さが再び脚光を浴びるのは、グレイシー柔術が日本にやってきた、木村の死後半年である。

後年生活に困窮しこのとき牛島らが奔走して母校拓大の柔道師範として、ようやく生活の目途がついた。このときも拓大の理事長が

木村の就任に難色をしめしたのだが、酒席半ばに「家内の体調がすぐれないので、これで失礼いたします」と言って立ち去った。これには理事長もいたく感激して許可がでたという。

木村が拓大の師範になってから、岩釣兼生が全日本選手権を獲得した。岩釣は木村の指導のもと、打撃あり、絞め技あり、関節技あり、つまりなんでもありの訓練を血だらけになりながら鍛錬し、アンダーグラウンドの大会で優勝している。米国で UFC というほとんどルールがない試合が開催されるようになったのは数年後の1993年である。

ルールが違うというのがいるが、富田常雄の姿三四郎に、互いの当身が交錯した、という表現が残っているが、今の柔道には殴られたり蹴られたりといった技はなくなっているが、柔道といえども初めからそういうルールだったわけではなく、古式柔術には寝技の達人もいたし、苦も無く繁栄してきたわけではない。現実には柔道人口が急速に減少しているのは、木村のいう「ブタの柔道」という面も強くなっているのではないか。木村には、講道館柔道の限界がわかっていたのだろう。技術的に正確な指摘をしている。

木村政彦は、13年間日本一を保ったが、そういう意味では全盛期

が長いともいえる。西郷四郎の全盛期は 2～3 年だったというし、木村の本当の意味での全盛期は 5～6 年、長くみて 7～8 年程度ではなかったか。しかし、20 年も 30 年も経過したときに、一流選手が手玉にとられた、ということから、全盛期の木村は、それこそ前人未到のはるかに高い境地に達していたのだろう。その境地がずっと裾を引いて、40 代後半にも 50 代になっても、「一番強かった」のである。

遠藤幸吉やユスフ・トルコ、エリオ・グレイシー・・・いずれも木村に会いたくなかった、と涙を浮かべる。それほど人間的にも男としても魅力のあった好漢だった。

分厚い本を前に、改めて増田俊也氏の労作に敬意を表したい。やっぱり、「木村の前に木村なく、木村の後に木村なし」なのである。

2012.03.20.